

## 経験の構造——私が哲学で考察してきたこと——

人の生を肯定すること、これが私の哲学の原動力である。というのも、この肯定をサポートするために人はどのように生きるものかをその嬖々まで緻密に理解し、その理解を言葉で言い表すことが哲学の営みだと考えているからである。緻密に理解するとは、人の生のさまざまな有りよう(ないし諸側面)の位置関係を明らかにするということである。(位置関係が問題だから、私は哲学を、地図を描く——正確には諸地図の地図を言葉で描く——という比喻で言い表してきた<sup>1</sup>。)

人の有りようの最も大きな括り方では、「A. 人は物的環境を体として生きるが、B. 意味世界をも生きる」と定式化できる。この定式化は、人が生きる上で見いだすさまざまな価値がどのような性格のものであるか、これを考えることから導ける。というのも次のような事情があるからである。私たちはさまざまな事柄の価値を感受ないし評価し、その影響のもとで態度を取ったり行動したりして生きている。だから、それら価値がどのようにして生まれ、どういう性格をもつのが重要である。しかるに人にとっての価値の出所は大きく分けて二つ、物的なものと同义的なものがある<sup>2</sup>。

さて、Aを先に記したのは、AなくしてBはないからであるが、Aは人間が生物であることを示している。価値発生の源泉はまずは自分の体の有りようであり、並行して、体が生き延びることを可能にすると同時に脅かしたり危険に晒したりする物的環境の諸々である。しかるに人間は複雑な体をもつ動物であり、自分では気づかない生理的過程は別にして、体を感じ、体の周りの物象を知覚し、運動する。感覚は体の有りようを告げ、知覚は物象を体を範型に体との関係で切り出し、感覚も知覚も適切な行動を導くのが本来の働きである。たとえば疲労や指の痛みは望ましくないものという価値相貌で現われ、休息するよう、物を掴むときには痛む指をできる限り庇うように仕向け、これらはともに体にとって望ましいことである。物的環境に目を向ければ、固い地面は体を支えてくれ、岩や茨は歩行を妨げ、茨は更に体を傷つけるものとして、苺は食べ物として、それぞれ或る(正負いずれであるにせよ)価値のもとで見いだされ、そこで人は固い地面を歩き、岩や茨は避け、苺を食べる。(哲学の伝統との関係で指摘することが重要なのは、感覚も知覚も空間性をもつことである。知覚の空間は原則として、感覚内容や知覚内容が携える価値——並びにBに属する諸々の意味事象の価値——に動機づけられて始まる行動、これの具体的姿としての体の運動がなされる運動空間として機能する。またこの運動によって感覚の空間規定は知覚の空間規定に統合される。体の広がりとは体の外の広がりには包摂されていて、体と体の外の諸々の物象、すなわち物的環境の構成物とは同じ資格で存在する。物質とエネルギーとの代謝がこのことを証している<sup>3</sup>。)

では、Bの意味世界を生きるとは、どういうことか。人は他の人々の中で生き、人と人との関係は二つの仕方である。一つは、各人からみて他の人は一個の知覚対象として知覚世界に現われ、その点で物的なものである。しかも空気や水とは違う固体状のもので、同程度のサイズの固体物体と同じような相手に過ぎない。抱えれば重いし、ぶつかれば痛い。しかしながら二つめに、人として特有な関わり方をし合うものである。そもそも赤ん坊のときに、乳、水、食べ物を与えてくれ、排泄物の処理等の世話もしてくれる依存相手であり、その人次第で自分の有りようが大きく左右される存在として出会うものであった。そして人は微笑みや声や愛撫等の仕方に関わってき、かつ、こちらの動きに対応して振る舞いを変える者、そこで相互に働きかけ合う相手であった。そしてそのような赤ん坊のうちに〈私〉が目覚め、〈私〉にさまざまな感情と想いが生まれるようになって後に理解することだが<sup>4</sup>、人と人との関係は基本的に、人がそれぞれにどのような感情や想いを懐いているのかによって決まってくる。感情や想いの作用は、人が動物であるということからくる関係を押しのけるほどと言うか、少なくともその関係の有りようまでも左右するような力をもっている。ただし人の想いや感情の多くが、人が動物であり体として物的環境で生きているということに関連して生まれるというのも、もちろんである。なお、人々が集団を成すことで個人に関係する仕方は、以上の基礎の上で、慣習や権力、制度等の発生仕方等を考察しなければならない。

さて、感情の方は後にして想いの方から先に言えば、想いを構成するのは人それぞれが見だし、また作り出す無数の意味事象である。それら意味事象は一方では所詮は各自の事柄であるが(イ)、他方で(意味事象の種類に応じて広狭さまざまとなるにせよ)或る一群の人々と共通と言ってよい性格をもつ(ロ)。(イ)は、想いというのは各自が懐く事柄だから当然である。しかしその想いは実は、人が「自分の外で流通していると思うもの、そして人々の実際の振る舞いからして流通していると思って差し支えないもの」の中から自分の意味世界に引き入れる仕方であることが多く、その結果(ロ)を言うことができる。そして人は他の人が抱える想いを想う仕方である。間接的に感受し、人の想いを自分にとっての一つの意味事象という形で自分の意味世界の一角に位置を占めさせることもできるし、それが人と人との間で相互になされることでもって、いわゆる誤解をも含みながらも十分に応答し合える。このことを私たちは屢々相互理解とかコミュニケーションとかの概念で捉えるが、応答は互いに「働きかけるという行動」の側面をもつことを見落としてはならない。そしてこの働きかけに、人間では意味が力をもつということの一つの場がある。(意味事象は価値的なものだから、人は意味に関わるあらゆる場面で意味の作用を受ける。俗に言う「観念の力」を想い浮かべると分かりやすい。それから特に指摘したいのは、社会の慣習や制度を成り立たせるものとしての意味の力である。この力が生まれ作用する次第については、言葉の力、シンボルの力、言葉から技術的手続きへの接続、それから

各種組織の生成等についての考察を含め、広範な論構成が必要となる。想いの内容をたとえば「観念」と規定することをせず「意味事象」とする理由は、「意味」という概念には、「重要であり——どうでもいいのではなく——、その重要であることの理由をも指す」という含みがあるからである。また、「何かが他の何か重要なことを指し示す、意味する」という事態があることが多いし、この事態が含む方向性にも留意すべきだからである。）

なお、ここで「想い」と記したものの根本を押さえれば、それは想像だと私は考えている。そして想像こそ人間に広大な領域を開くもの、人間的な事柄の大元にあるものである。（人間に固有なものとして語られることが多い理性や精神という概念の中身は私には曖昧である。ただ、想像の有りようを考察することでそれらの実質的中身を理解しようと努力することもできないわけではない<sup>5</sup>。それから思考もまた想像の或る仕方での働かせ方である。ただ、言葉の使用は不可欠で、場合によって更に、思考内容に相応しい種類の記号の創出と使用が必要とされる<sup>6</sup>。）

想像の起源は人間の知覚の有り方（他の動物とは違った様態）にあり、かつ二つの事態に想像の誕生の場がある。一つは知覚の空間規定という事態。知覚による行動の導きは諸々の知覚対象の知覚空間における位置を一つの重要な契機とする。そして行動は知覚空間を運動空間とみなして利用しつつ知覚対象の空間規定を変える。そこで、その運動あるいは変化の先取りとしての空間規定に関する想像が生まれる余地がある。「想像」という言葉の「像」という空間的性格を帯びた部分に、この起源の名残が窺える。例として、灌木の茂みの向こうに頭と尻尾が見えている猫の隠れて見えない胴体も想像してしまうし、音が近づいてきて反対方向に遠ざかる時、音を出すものの行方を想像する。また、これも知覚の空間規定が招くことなのだが、私たちはほとんどの場合に「知覚対象とその諸々の知覚的質」という分節構造のもとで知覚する。（異種の知覚的質が一致して一つの知覚対象の性質とされるのは、それらの質の空間規定の一致ゆえであり、また、知覚対象を相手にすることでどの知覚的質をも相手にすることになるからである。）そこで、たとえば人は或る匂いを嗅いで桃を、更に果汁の多さや甘さを想像する。（この場合、既にその匂いを嗅いだり桃を食べたことがある等の経験ないし知識が必要だが、その知識は意味事象の或る形であり、想像の働きに支えられている<sup>7</sup>。なお、この分節的捉えが、人が何であれ何かを「諸性質を・もつもの」と捉えることの原型となっている。すると、或る性質を確認すると他の諸性質のうちの何かを想像するということが生じがちである。これは、ここでは詳論できないが、知識の増殖にも関係する。また、人間の言語が主語と述部の構造をもつことも、この分節的捉えに連なっている<sup>8</sup>。）

想像の起源となるもう一つの事態は、先に述べた、人にとって他の人との関係は極めて重要であるという事態である。具体的な特定の人を物的な体という知覚対象として現われるが、その体の

有りよう、表情、佇まい、行動等に、それらを知覚する人はその人の体の感覚や思い、感情等を読み取る。読み取りとは「何かに・それが意味するものを・読み取る」ということで、それは想像の一種である。(また、このことを当てにして人は積極的に意味を発信しもする。すると直ぐに気づくように、人間関係で言葉の働きは極めて重要である。言葉は意味を担うが、人に働きかけるものだとすることを忘れてはならない。また人相互の関係を離れて、個人における「内語」に代表される言葉の使用がその人の想像を飛躍的に発展させる。「人間の言葉」が「動物の言語」と称されるものとは違う特性をもつこと自身が実のところ想像の働きを当てにしているのではあるが、人がいったん獲得した言葉の能力なしには想像は羽搏<sup>はばた</sup>かない。また、序でに人間の行動に関して言えば、その瞬間々々に必要な動物的行動ではなく、前もって行動の結果を推測し、計画も立て、長い時間の中から飛び飛びの時間を使って為してゆく、そのような行動ができるのも想像の働きがあるゆえである<sup>9</sup>。)

次に感情である。私は、人の人らしさを構成し、かつ人個人の最も中心を成すものは感情だと考えている。しかるに感情はあれこれの価値事象の感受の強い形であり、そして人間では諸々の意味事象が重要なもの(価値を携えるもの)として力をもつ<sup>10</sup>のだから、感情は、感覚内容や知覚内容が携える価値の感受から生まれるのと並んで、むしろ多くはそのときになす何らかの意味の理解とその価値的側面の感受から生まれる。そして在るとは何であれ現在に在るということで、だから感情はその時々(私)の現在を、感覚内容と知覚内容とともに満たす。(感覚が「(私)の現在の事柄である」というのは、感覚は自分の体ないし体の局部の状態を告げるゆえに頷けるが、知覚は元来が体の特定とともにしかない(私)とは別の存在——体の外の存在——の捉えである、なのに、どうして(私)の現在を満たすと言えるのか。知覚は(私)とは別の存在の捉えであるとしても(私)の行動と関わる可能性があるという観点からの捉えであり、(私)がなす事柄である限りで(私)の存在に参与するという性格ももっている。この性格は特に行動から全く離れた知覚様態において目立つ。人間には、知覚すなわち行動へ、という引き継ぎの場合よりは、行動の前に自足した知覚があつて後に行動を導く場合が多いし、更に進んで知覚に没入するという様態もある。この三つめの様態における没入とは実は知覚的質の感受であり、この感受の強さが知覚的質を有した知覚対象の空間規定という契機を薄れさせる。たとえば知覚する人が形や色彩とそれらの配置の調和に魅せられるとき、その内容から空間規定が消えるはずはないが、少なくともその空間性は「体の運動空間である」という原則的な性格を削ぎ落としたものになっている。なお、このような知覚様態では、音に聞き惚れ、色の美しさに心奪われ、匂いや味、肌触りの良さや心地よさにひとときを委ねるなど、好ましい経験であることが多い。なぜかと言えば、嫌な音、不快な色等の場合には、それらから逃れようとする行動が生じがちで、知覚は行動との関係を直ぐに取り戻すからである。ただし、このとき、音や色等の知覚的質を

直接に相手にはできない。音を出すものや色の付いたものないし光等を行動対象として間接的に音と色等の知覚的質の有り方を変える。なお、ここで「嫌だ」とか「好ましい」とかの感情的な言葉が出てきてしまうのも、結局は価値の感受がいつでも問題であり、感受の強い形が感情に他ならないゆえである。こうして、人個人のそのつどの存在の中心を成すのは感情だということが表だってくる。また人が何かを想像するとき、行動するとき、それらの活動そのこともそのときの人の存在を満たすが、想像は意味事象に関わるのだから意味事象の価値の感受があるし、行動にもその内面があるのであってみれば、人における感情の中心的位置取りは微塵も揺るがない<sup>10</sup>。)

因みに、行動は人個人の流れゆく時間を統合し、その統合を通じて一個の〈私〉の獲得を目指す。言い換えれば、〈私〉の存在はその都度の現在の存在の連鎖に尽くされるのではないように思える。しかるに、これはどういうことかと言えば、時間の流れを通して一つのものであるものとしての〈私〉とは、人が気に懸ける一つの特別な意味事象、想像が象<sup>かたど</sup>る自己像なのである。そして、〈私〉ならざる他の身近な人々もそれぞれ〈私〉についての像を各自の意味事象としてもってくれる。それら像の違いが私たちの人間関係を複雑にもし、人を変化させもし、また味わい深いものにもする<sup>11</sup>。

---

<sup>1</sup> 『価値・意味・秩序』(東信堂、2014年)第1章(初出『〈私〉というものの成立』勁草書房、1994年)、および第2章(初出『哲学への誘いⅠ 哲学の立ち位置』東信堂、2010年)を参照。

<sup>2</sup> 『価値・意味・秩序』第4章(初出『哲学への誘いⅢ 社会の中の哲学』)を参照。

<sup>3</sup> 『知覚する私・理解する私』(勁草書房、1993年)、『経験のエレメント——体の感覚と物象の知覚・質と空間規定——』(東信堂、2015年)等を参照。

<sup>4</sup> 〈私〉の成立については、『価値・意味・秩序』第1章を、〈私〉と意識の概念との関係については『経験のエレメント』を参照。

<sup>5</sup> 部分的には『感情と意味世界』(東信堂、2016年)を参照

<sup>6</sup> 記号については『言葉の力』(東信堂、2005年)を参照。

<sup>7</sup> 近刊『想像Ⅰ』で論じている。

<sup>8</sup> 『言葉の力』を参照。

---

<sup>9</sup> 人間の言葉の特性については『言葉の力』を、言葉が声としてどのようにして成立するかについては『音の経験——言葉はどのようにして可能となるのか——』（東信堂、2006年）を参照。選択的行動と諸意味事象の連関との関係については、『価値・意味・秩序』第7章（初出『哲学への誘いⅤ 自己』）および『感情と意味世界』を参照。

<sup>10</sup> 人間の知覚の三つの様態については多くの著作で論じている。感情と意味事象との関係については『感情と意味世界』を参照。行動については『知覚する私・理解する私』と、簡便には「行動の論理」（立正大学哲学科編『哲学 はじめの一步』第2分冊『行動する』春風社、2015年）を、技術的行動と科学的認識との関係については、因果性や法則の概念についても論じた『知覚する私・理解する私』も参考にした上で、「生じることと生じさせることとの間」（『論集』26、東京大学文学部、2008年）、および「自然、機械、人間」（『哲学雑誌』第132巻第804・805号合冊、哲学会、2018年）を、行動の内面については、渡辺誠・木田直人編『哲学すること——松永澄夫への異議と答弁』（中央公論新社、2017年）所収の越門勝彦氏の論文「「行為の内面」をめぐる二つの問い——行為者の主観性についての試論」と、それに対する松永の答弁を参照。

<sup>11</sup> 在ること（その都度の現在に在ること）と為すこととの対比については『価値・意味・秩序』第9章（初出『死』岩波書店編、現代哲学の冒険①、1991年）と第7章を、また特に「想い」と自己の存在との関係については第3章（初出『哲学への誘いⅡ 哲学の振る舞い』）を、自己像については『感情と意味世界』を参照。